

「ライフ」創刊とユージン・スミス

一九三〇年代には、もう一つ重要なドキュメンタリー写真の流れが芽生えてきます。一九三六年に創刊され、またたく間に数百万部を超える巨大メディアに成長した週刊グラフ雑誌「ライフ」に代表されるフォト・ジャーナリズムです。実際には、本格的な大衆向けフォト・ジャーナリズムが産声をあげたのはアメリカではなく、一九二〇年代のドイツでした。ライフのような小型カメラの発達もあって、事件や出来事を素早く、いきいきと定着した写真が人々の心をとらえ、エーリヒ・ザロモン、マーチン・ムンカッチ、フエリックス・マンといった写真家たちが活躍しました。ところが一九三三年にヒトラーが政権を握ると、多くはユダヤ人であった写真家や編集者は、国外に亡命せざるをえなくなりまう。

一九二〇年代に発行部数が二百万部を超えていたというグラフ雑誌「ベルリナー・イルストリルテ・ツァイトウング」の編集長だったクルト・コルフもその一人でした。彼はアメリカに逃れ、タイム社の社主のヘンリー・ルースと組んで新しい大衆向け雑誌を企画します。実際にはコルフは創刊前にタイム社を去るのですが、「見て驚くことであり、見て学ぶことである」（「ライフ」創刊予告）というヴィジュアル重視の方針に徹した「ライフ」の基礎には、彼が持ちこんだドイツ流の合理的なフォト・ジャーナリズムの方法論があったわけです。

「ライフ」にはマーガレット・パーク・ホワイト、アルフレッド・アイゼンシュタット、カール・マイダンスといった優秀な写真家たちが力強いフォト・エッセイを発表しました。フォト・エッセイというのは、組写真と文章を有機的に結びつけて、出来事を物語として読みとらせることをめざすやり方です。写真は単独では抽象的な概念や複雑なメッセージを伝達することはむずかしいのですが、この方法によって、曖昧さを排して、読者を明確に一つの方向に導いていくことが可能になります。それは写真を言葉のように自由自在に使いこなしていきたいという写真家たちの夢の実現でもありました。

第四室の扉（扉ページ）に掲げた写真（60）は、「ライフ」一九五一年四月九日号に掲載されたW・ユージン・スミスのフォト・エッセイ「スペインの村」の中の一枚です。中世以来時が停まっていたようなスペインの小さな村のさまざまな場面を、スミスはじつくりと腰を据えて撮影しています。この写真では亡くなった老人の死を悼んで集まってきた村の女たちの姿が、彼独特のダイナミックな画面構成と光と影の配分によって浮かびあがってきます。死が日々の生の営みの中に組み込まれ、共有されている共同体の雰囲気、宗教画を思わせる画面に見事にとらえられているといえるでしょう。

スミスは「ライフ」の契約写真家の時代（一九四七―五五）に、このようなヒューマニズムの精神に根ざした印象深いフォト・エッセイを次々に発表しました。「田舎医者」（一九四八）、「助産婦モード・カレン」（一九五二）、「慈愛のひと―シユヴァイツァー博士」（一九五四）などがよく知られています。商業主義に反発して「ライフ」を辞めてからも、「真実と人間愛」を求めるドキュメンタリー写真家としての立場を貫き通しました。最後の仕事となったのは、九州に住みついて一九七一年から五年間撮影を続けた「水俣」のシリーズで、あくまでも、弱者の側に立つ彼の姿勢が明確に打ち出されています。

この写真（68）は「水俣」のシリーズの中でも最もよく知られている一枚で、胎内で有機性水銀中毒に感染した胎児性水俣病患者の少女を、母親が風呂に入れようとしています。こうしてみると、受難の場面を祈りとともに受け入れ、提示しようとするスミスの姿勢が、「スペインの村」以来一貫してい

ることにあらためて驚かされます。スミスはヒューマニズムへの信頼を信仰のように保ち続けている。しかし、そんな姿勢を貫くことは、彼が一九七八年に亡くなつてから以後、ますますむずかしくなりつつあります。

土門拳の『筑豊の子どもたち』

日本の『社会派』の代表的な写真家としては、土門拳の名前をあげたいと思います。もちろん土門の仕事は、ライフ・ワークとなつた『古寺巡礼』シリーズ（一九六三―七五）や、肖像写真、風景写真など大きく広がっているのですが、一九五〇年代の彼は「今日ただ今の社会的現実に取り組む」ドキュメンタリー写真の方法論の確立に全力投球していました。ここにとりあげた写真は、ザラ紙に印刷されて『百田写真集』として発売され、十萬部以上を売りつくしたという話題作『筑豊の子どもたち』（パトリア書店、一九六〇）の中におさめられているものです（69）。

「るみえちゃん」と「さなえちゃん」という、失業中の父親と暮らしている母のない姉妹の姿は、エネルギー政策の転換によつて廃坑が相次いでいた筑豊の炭鉱地帯を象徴するイメージとして、大きな反響を呼びました。当時から「かわいそうな子どもたちに寄せる安易なヒューマニズム」（岸哲男）ではないかという批判があつたことも事実です。しかし『筑豊の子どもたち』には、社会の矛盾を声高に告発する紋切型のジャーナリズムではすくいとれない、一人一人の人間の営みを柔らかに見つめていくような姿勢がはつきりと見えるように思えます。この写真でも、子どもたちと土門との間には、見えない信頼の糸が結ばれているようです。土門拳は、いかつい鬼瓦のような風貌の持ち主ですが、「子どもたち」の世界にすつと入っていきけるような、不思議な包容力を備えた写真家でした。

残念なことに、『筑豊の子どもたち』の取材を終えてすぐに、土門は脳溢血の発作で倒れ、すぐに再起するものの、以後は社会問題に直接踏みこんでいくような撮影はむずかしくなっていくます。たしかに日本人の伝統的美意識の起源を探る『古寺巡礼』は力作なのですが、彼にはもう少し現実に全身で触れあうような写真も撮り続けてほしかったと思います。

◎ 土門拳『筑豊の子どもたち』（一九六〇）より

